

令和4年第2回置賜創生懇談会 会議録要旨

○日 時：令和5年3月2日（木）14:00～16:00

○開催場所：置賜総合支庁本庁舎2階応接室

○出席者：別紙のとおり

○次第：

- 1 開会
- 2 あいさつ
- 3 意見交換 テーマ「山形くらしを楽しむ」

(1) 1巡目①「(山形くらしの中で) どういう時に幸せを感じるか」

②「山形県の誇り・地域の誇りと思うところは」

③(県外居住の経験がある方のみ)「県外に出て初めて知った山形の良さ・地域の良さは」

(①～③すべてについてでも、1つに絞っての発言でも可)

■伊藤 優子さん

○私は生まれも育ちも米沢市で1度も米沢市外で生活したことがなく、米沢ネイティブで、山形暮らしについてどう感じているか問いかけがあったとすれば、これが日常ということ。

ただ、県外の方から教えていただき、山形のこういうところすごいよねと言われ、はっと気づくことが多々ある。その中のエピソードとして1つ紹介させていただくと、米沢の方言で「しゃいこ」という言葉がある。おせっかいみたいな意味で使われたりするが、良い意味でいうと「親切」になるかと思う。東京からいらした方で、米沢駅から上杉神社に行こうとして着くまでに、3人の方に「どちらに行かれますか。」「案内しますか。」と声をかけられてとてもびっくりしたと言っていた。こういった話はその人だけではなく、複数の方からお聞きしたことがあり、米沢の人は良い意味で、「しゃいこ」だと思う。

また、弊社を面接で受けに岩手県から来た女子大学生が、午後からの面接のため、昼ご飯を会社の近くのファミレスに食べに行ったら、隣の席に座っていたお婆さんから、高校生だと思われたらしく、「こんな時間にこさいで大丈夫なんだが」と話しかけられたと。「大丈夫です。これから面接受けに行くんです。」と答えたら、「頑張ってね。あそこはいい会社だよ。」と言われたそう。その後、面接を受け合格したが、今でもその子は「ファミレスで声かけてくれたお婆さんがすごく親切だったし、会社の話もしてくれたので、私はこの会社に入りました。」と言ってくれる。米沢の人の温かさを外の人から教えてもらうのは最高だと思っている。

○反対に、米沢の最大のウィークポイントはやっぱり雪だと思う。私もここに長く住んでいて、この雪だけは本当に子供の時から苦労してきた。この先、年齢を重ねていくと、移住を考えないといけないかもしれないと思うほど困っているが、山上さんが川西町で実施されている雪国体験ツアーのように、雪をこういうふうにかこう生かして克服すれば、幸せを感じられるよということをやっていくことが、今後大事だと感じた。

■大垣 敬寛さん

○地域の魅力については、私は神奈川県横浜市の出身で、大学を卒業して東京から山形に移住して大体8、9年ぐらいになるが、1番感じるどころとしては、バランスの良さかと思う。山形は文明的なものと、自然との調和がとてもとれた地域だと感じる。

私はもともと中学、高校の頃は東京に1時間半かけて、満員電車で揺られながら通っており、どうしても昔から都会は人が集まりすぎていると感じることが多くあった。一方で山形に来てから感じたところは、非常に住みやすい地域だということ。ごみごみした感じがしない。

また、文明的なものというか、さまざまな面白さだったり楽しさだったり、学びになるものについて地域ならではのものがある。先ほど話に出た雪ももちろんそうだし、楽しみ方を変えればいくらでも楽しむことができる。本日も10時過ぎに赤湯を出発して、東京に来たが、来ようと思えば2、3時間で東京に出ることもできる。地理的にはいろんな体験をするにも困らない非常に良いところだと感じている。普段は本当に住みやすいと感じているし、たまに運転が怖い時はあるが、まだ雪を私は楽しめているので、今のところ不便と感じることもない。

■遠藤 茜さん

○前回出席した際に、2つの大学サークルのボランティア活動についてお話したが、その他にNPO法人の学生団体に所属しているので、その話をメインにさせていただきたいと思う。NPO法人ドットジェイピーという学生団体に所属しているが、団体は若年投票率の向上を目的として活動しており、活動内容としては、米沢女子短期大学や山形大学などの大学生が、同じ大学生にインターンシップを提供する活動をしている。インターン先は議員の方のところになる。

政治の問題であったり、地域の課題について自己研鑽に繋げたりすることを目的として所属しているが、今回その活動をとおして経験したことをお話しする。地域の方々が温かいというのが置賜地域の良いところだと思う。私たちの団体の活動に各地域の議員の方も協力してくれている。議員の方のほうも、大学生の意見が知りたいし、関わりたいと言ってくれている。大学生がやりたいと思ったことや、大学生の声を受け入れてくれる地域の人や議員の方がとても多いと感じている。

○ボランティア活動をとおして、地元の人との繋がりや温かさを感じたことと同様に、この学生団体の活動でも、議員の方達の活動も、地域の人との関りがあってこそ成り立つものだと感じ、米沢の人の温かさも改めて感じた。

前回、聴覚障がい者の方が大学の授業を受けるサポートをパソコンで行っている話をさせていただいた。現在60名以上がサークルに所属していて、みんなでボランティア活動をしているが、誰かのために、何かのためにという思いがある大学生が多いと感じている。そうやって人と繋がっていることは、とても素敵なことだと感じている。人との温かな繋がりを大切にしていきたいし、そういったことを感じられることが山形の良さだと思う。

■齊藤 幸恵さん

○私は20年以上前に東京から山形に来たので、どちらかというと東京の感覚の方が鈍っているかもしれない。私が感じる地域の魅力は、空気の綺麗さである。家族で実家である東京に帰ると鼻毛が伸びるのが早いと話していてそれは、山形ほど空気が綺麗じゃないからじゃないかという話しになる。子供達も、東

京に行って、こちらに戻ってくると、とても安心すると言う。また、景色の美しさと、なによりご飯の美味しさには魅力がある。また、嫁いでから同居はしていないが、近居という形で祖父母（夫の両親）と交流している。私は母方の実家が滋賀だったので、祖父母とは夏休みにたまに会うぐらいだったので、なかなか言葉がわからず、あまりコミュニケーションが取れなかった。こちらだと3世代同居もとても多く、職場でもお孫さんをすごく可愛がっている姿を見る。うちの祖父母も孫のことをかわいがってくれており、親以外に、甘えたり無条件に愛してくれる人がいるというのはとてもよい環境だと思っている。

○また、食べ物や農作物をもらうことがとても多い。私も東京時代は、お客様の家に行く際は、お菓子などを買って持っていくことがあったが、今は例えば自分で作った干し柿や、農作物を持っていったり、反対にもらったりもしている。東京だったら高級食材である蕨やゼンマイ、タラの芽、コシアブラがうちの山にあるが、義親からはよくお世話になっている方へ差し上げてと農作物をくれる。そして差し上げると皆さんに大変喜ばれる事が多く、豊かだなと感じる。

そんな高級食材の価値を知ってもらうため販売しようと立ち上げたのが、運営しているおきたま四季の暮らし舎である。宮城の大学の建築学科の方たちにパンフレットを作ってもらった。学生達が私の話を聞いてパンフレットに書いた文章が「見える景色のすべてを食べ尽くす」というフレーズで、本当に景色が全部食べられるよう感じられると思い、反対に学生から教わったと感じている。

○置賜地域には季節の良さがあり、住みやすいが、特に米沢は、県内でも豪雪地域で、先ほど伊藤さんもおっしゃっていたように雪は本当にネックになる。冬のその除雪にお金をかけてしっかりやっていただけのだけで、全然イメージが違うと思っている。また大垣さんも本日リモートで会議に参加できるような環境もあるので、警報級の大雪等であれば、無理をして出勤せずリモート出勤するなどの意識がもっと職場などの場で根付いていけば、冬の生活も変わっていくと思っている。

■平 浩一郎さん

○山形の誇れるところについては、やはり自然環境のよさ、そして食の豊かさ、食文化だと思う。私が住む長井市の水は、硬度が20以下の超軟水で、とても美味しく綺麗だというのが自慢である。弊社はこんにゃくを作っているが、その8割、9割が水分で、製造にも大量の水を使うので、食品製造業を営む者としては、本当に幸せなことだと思っている。全国からたくさんの同業者が工場見学で来ているが、水について皆さんから羨ましがられる。

また、水が欠かせない商売ということもあると思うが、地元の小学校から総合学習として、水についての授業の依頼があり、何度か学校に出向いて授業をしている。授業の最後に、今の水をめぐる状況にも触れながら、こんなおいしい水が水道の蛇口から普通にこう出てくるといことは幸せなことだよ、当たり前ではないんだよと話している。山形の食品自給率は上位のほうだと思っていたが、配布資料を見て、全国3位ということに驚いた。北海道が1位というのは容易に想像がつくが、それを除くと、2位ということは本当にすごい。山形県で農産、畜産が盛んであるのは、豊富な水、肥沃な大地があって、気候風土、そしてそれに情熱を傾ける生産者がいて、高い数字になって現れるわけなので、これらすべてが山形の誇れるところだと思う。

先ほどの小学校の授業の話に戻るが、日本は世界一の水の輸入国であるという話もする。これは、水自体ということではなく、輸入してる穀物や肉などを生産するとしたらどのぐらい水が必要かという、バーチャルウォーターという考え方である。水が豊富にあって、高い自給率を誇るということで、山形は長

井に限らず全県で水が美味しく豊富であることは大いに誇れるものだと思う。

○以前芸工大とコラボして商品開発をしたことあるが、その時に芸工大の先生である東京の方に、「都会の人は山形に対して本当に良いイメージを持ってる方が多いですよ。」と言われたことがある。米、果物など食べ物は当然として、お酒も美味しいし、齊藤さんのお話にもあったが、すぐ山にいけば山菜が取れるし、美味しい料理もたくさんあって、本当にうらやましいと言っていた。これはとても幸せなことだと思う。私達からすると、本当に普通のことなので、外に出て、客観的に比較できる状況にならないと、なかなかわからない、気づけないことで、他県の人から言っていたで改めて気づくことである。

○また、長井市には伝統神事の黒獅子の獅子舞がある。市内各神社に伝わっており、笛太鼓とともに各地区の氏子さん1軒1軒を練り歩く。私の娘2人も、地元の神社の獅子連中に入って活動している。例大祭の日は日付が変わっても帰ってこない。幅広い年代の人と、行動するというのが楽しいようだ。それに関わっていることがかっこよくて、誇りに思っているとも言う。本人は東京の学校に行く希望があるようだが、この時だけはもう何が何でも帰ってくると言っている。こういう血が騒ぐような祭だったり、伝統芸能は、郷土愛を育むには欠かせないものかと思う。若者が進学や就職で県外に出るのは、そこでしかできないことや憧れもあるので、止めることはできないが、将来のUターンのためにも、田舎を肯定的にとらえる思考というか、地方の良さ、素の生活を楽しむという感覚を、子供の頃から養うということは、本日のテーマを考えた時に、改めて大切だと考える。

○最後に、山形には良いところがたくさんあるので、県外の方にも山形くらしを楽しんでほしいなと思うが、先ほどから話に上るが、やはり雪や寒さが嫌われるのかなと思う。スキーだったり、スノボだったり、温泉だったり、最近話題になったラーメンだったり。温泉なんかは、全ての市町村にあるということも山形の1つの売りだと思うし、山形の素晴らしいところだと思う。ラーメン文化も本当に身近にあって、ランキングで話題になるのも誇れることだと思う。冬に楽しめるものもたくさんあるので、雪が降って四季がはっきりしているところも魅力なので、マイナスと思われるところをいかにプラスにとらえられるかだと思う。先ほど伊藤さんからは、移住も考えるというお話があったが、外から来ていただくのに、雪はネックになっているのかもしれない。先日も移住地ランキングを見る機会があったが、残念ながら山形が全く入っておらず、温かい地域が入っていた。冬を楽しむということを地道にアピールすれば、山形にも来てくれる方も増えるのではと思う。

■堀江龍弘さん

○私はもともと飯豊町で生まれ、大学時代と社会人時代に長年山形を離れていて、また戻ってきたUターン組である。子供も今5年生、1年生、幼稚園年中で、爺ちゃん婆ちゃんと一緒に暮らしている、典型的な田舎の大家族で暮らしながら仕事をしている状況だ。

○今回の話をいただいて、どういう観点で地域の誇りについて話そうか考えたが、3点あると思っている。1点目は自然的なところ。2点目は文化的なところ。3点目は仕事において挑戦できる環境があるということ。

○1点目の自然がいいなと思う瞬間は、小さい頃より、Uターンして戻ってきてから感じることの方が多い。私は丁度田園に水が張られて、蛙が鳴いて、これから祭が始まる時期の5月に生まれたが、そういう時期がとても好きだ。夕暮れに子供達を自転車の後ろに乗せて、田んぼの方まで行くのも楽しい。これだけでも、都会で育ち、馴染みがない方からすると、お金を出してする体験の1つになりえると思う。そ

ういう素晴らしい風景を日々の生活で感じることができるというのは山形の魅力の1つだと思う。

また、会社の本社は飯豊町にあるが、現在南陽市赤湯を拠点として仕事をしており、ここ1年半くらいは毎日飯豊町から赤湯に通勤する生活をしている。通勤時間ができたことで置賜良いなと思うことが多くなった。通勤中に置賜盆地を見て、今日は霧が濃い、快晴だ、雪が多いなど、ふとした瞬間、風景の素晴らしさを感じることができるのはとても贅沢なことだと感じる。長いこと置賜に住んでいたが、こういった素晴らしさに気づいていなかった。

○2点目の文化的なところについては、先ほど平さんも仰っていたが、飯豊町にも黒獅子祭がある。私が飯豊町に戻ってきた時に仲間がすぐに受け入れてくれたり、また、同級生の旦那さんが移住してきて新たに祭に参加してくれたりすることはとても嬉しく楽しい。我々は普通に生活しているが、他の地域や、世界的に見たら珍しいと思われたりもすると思う。人と人との繋がりの中から素晴らしい文化が成り立っていることは贅沢だと感じる。

○最後に、挑戦できることについては、今は住宅業がメインとしながら、米沢に無人のビジネスホテルや、赤湯にコミュニティラウンジを運営したりしている。この間、関東の同業の社長と話していて「こちらで建設業をすると絶対面白いよね。」と言われた。田舎で建設業を営むのはずっとハンデがあると思っていたが、我々の様に建物や空間を扱う仕事について、東京ではどうしても不動産のやり取りで、とんでもない金額が動くので大手しかなかなか取り扱えないが、置賜に関していえば、空き家の問題や、店舗の問題や、土地をどう利活用するかという問題について、なんとかやってみようとする人もとても多いと感じている。

私は今赤湯のイオンタウンに土地を借りているが、日本のイオンの中で最も家賃が安いところだと言われており、そういった経費を抑えて事業を行えるメリットもある。また、飯豊町の羽前椿駅のところでシェアハウスをやろうという話になった時も、もともとの所有者や、利用者の方も快く受け入れてくれ、町の行政からも頑張ってもらいたいと応援いただいた。それは多分山形市内でも、仙台でも、シェアハウスのオープンが難しかったと思うが、置賜という地域だからこそ、そういったチャンスがあり、チャンスが生まれやすいと感じている。

■山上 絵美さん

○地域の誇りと思うことについて団体で実施している事業をご紹介しますながら、3点お話をさせていただきます。

○初めに、私は長井市出身、長井市在住で、先ほど平さんから話があったように、長井市は小学校の時から水の町であるということ、社会科見学などをおして教えたり、調べたりする取組を行っている。そういう下地があるので、長井市の人には大人になっても、うちの町は水がきれいで豊かな町だと誇りに思っている。

現在縁があり、2011年から、交流の推進や移住の推進をメインにやっている川西町の団体で働いているが、川西町で誇りに思うことはなんだろうと改めて考えてみた。三菱鉛筆や田んぼ、米沢牛、ダリアとたくさんあったが、移住フェアなどについても、参加者の方々には、なかなか川西町について理解していただけなかった。米沢牛を配るわけにも、ダリアを配るわけにもいかず、どうしようと思ったときに見つけたのが紅大豆である。紅大豆という商標登録を取っている豆が川西町にはあり、2014年頃に注目し、他にも豆があるのではないかと探したら、1週間に24種類も見つかった。白黒のパンダ豆やトラ柄のト

ラ豆、いっぱい取れるからということで親孝行豆と名付けられた豆など、たくさん種類があり、こういったものをサンプルとして豆瓶に入れて、川西町の方々の前にお持ちしたら、ご年配の方々には、これは昔こうやって食べたという話で盛り上がり、若い方々は、今は洋風に調理してみるといいんじゃないかと、盛り上がった。こうやって盛り上がるのであれば、豆も町を印象付けるものとしてよいのではないかと思います、その年に都市部で開催された移住フェアでお配りしてみた。その時も、単にビニール袋に入れて配るのではなく、川西町の暮らしを想像していただけるようなパッケージもつくりながら、丁寧な暮らしを営んでいることをPRして豆を配ったところ、30代の女性がとても反応してくれた。こういうふうに、女性が反応してくれるということは、もしかしていけるのではと思ったのがこの時だった。

地域の方々にとっては誇りと思っているものは、ダリヤや、米沢牛などいろんなものがあるが、その中で私たちが川西町を印象づけるものとして取り上げたのが豆で、これを広めていこうとした時、女性の仲間を集め、「マメリエ」と名付けた。まずこういった発信をおこなっていることが、川西町を誇りと思ってもらえる取組の1つである。

○2つ目に、交流から気づく誇りもあるのではということで、皆様にお配りした資料が「豆の展示会」、通称豆展の取組を紹介したものである。

これは、谷中地区で2015年から開催しているもので、豆の展示会については、この場では説明はしないが、豆展は出展者、スタッフそれぞれが主となって関わらざるを得ないほど、お客さんがくる取組になってきた。豆展では様々なこと聞かれるので、川西町のことを知らないと言えないし、交流もできないということで、皆さん勉強した上で参加している。人材の横の繋がりもできてきたことが2つ目の誇れる点だと思っている。

○3つ目に、豆は1点突破ということで、豆をきっかけに川西町に関心を持ってもらい、繋がりの中で、他にもおいしいものがあることなどを、他県の人に参加した川西町の人が話せるようになった経験が誇りとなっていると思う。

また、豆展などの取組が面白いということで、NHKの全国放送や、全国誌の雑誌などで無料掲載していただいている。そういったもので発信してもらえることで、外部から、「川西町すごいね。豆の町という面もあるんだね」と言われると、イベントに関わりがなかった方々も関心を持たざるを得ない状況になって、今に至るという状況である。

こういった取組をとおして、川西町の皆さんが川西町を誇りに思うきっかけになればと思っている。

(2) 2巡目 配布資料「県民の幸福度に関する調査結果について」の評価として、

有識者（放送大学名誉教授、千葉大学名誉教授 宮本 みち子氏）より県民の幸福度を高めるために以下のことが有効とのご意見があったことに対する意見等

- ①幸福度の向上には山形県の良さ、肯定感の醸成が有効
- ②女性の職場環境の改善が有効
- ③寛容性を高める取組みが有効

■伊藤 優子さん

○まず私がこの配布資料のアンケート結果に関して感じたことをお話ししたい。男性よりも女性の方が、幸福度が高いことについてだが、理由として私の予想だが、山形県の男性の場合、長男であれば、家を継

ぐという考えが他の都道府県と比べると強いのかもしれない。裏を返せば、山形県の男性はとても責任感が強く、家を大事にしているという意味になるかと思う。こういった古い家族制度みたいなものがまだ根強く良い表現ではないが、家に縛られていると感じる男性も多いのかもしれない。例えば都会にキラキラした夢があったが、諦めて、暮らしている方が多いのかもしれない。男性の意見を聞いたわけではないが、そういったところが幸福度の低さに繋がってる面もあるかと思う。逆に女性の方が自ら選んで山形に住んでいる人が多いので、男性より幸福度が高いのかもしれない。

○もう1点気になったのが、その女性が理不尽さを泣き寝入りする、しがらみという表現があったが、これは女性だけの問題ではなく、むしろ男性の方が職場の理不尽さを感じている人が多いのではないかと思う。これは男性の方が我慢している数字ではないかと感じた。女性は理不尽さを言葉に出すので数字に現れて、男性はそれを飲み込んで、克服することが当たり前という感覚だから、あまり不満として表に出てこないのかもしれない。

もしそういうことがあるのであれば、女性だけの話ではなく、男女問わず、平等に職場の環境を変えることが必要である。女性の環境を良くしましょうではなく、全体の環境を良くしようとしなければ片手落ちになってしまうと感じる。どうしても女性のことに目が行きがちであるが、女性、男性、両方の特性を活かす世の中にするのが男女共同だと思っているので、女性だけを手厚くするというのではないと思う。

実際、最近育休や、産休について女性はとても取りやすくなってきており、女性の働く環境は前から比べればとても改善されていると私自身は思っている。弊社でも厚労省のえるぼしを取っているが、男女平等で協力し合うという考えの方が、今の時代にあっているのではないかと思う。

○もう1点、ケーブルテレビの取組として、自分たちが住んでいる地域を誇りに思ってもらふ番組「おらほの宝」を制作している。「おらほの」だから、自分たちの地域の宝物を地域のレポーターが探しに行きましょうというコンセプトである。結果、レポートになってくださった地元の方からは、番組の最後に、「いやおらほの地域さ、こがなものがあると思ってねえっけ」と皆さん言うてくださる。それは地域再発見ということである。自分たちの地域の魅力を掘り起こし、それを見ていた人がなるほどと思ってもらふ取組を、大分前からやっており、Y o u T u b eでも「おらほの宝」で検索していただくと出てくるのでぜひご覧いただきたい。こういったものを私達が作っていくというのも、ケーブルテレビの役割の1つと思っている。

■大垣 敬寛さん

○私は意見の①、③中心にお話ししたい。

○まず①の幸福度の向上に山形県の良さや肯定感の醸成が有効、という意見についてだが、先ほど伊藤さんも仰っていたが、自分で選ぶからこそ幸福度が高いということは、私もその通りだと思っている。

自分で選ぶことができ、その選択肢を持っているかどうか非常に重要だと感じている。選択肢を作っていくというのは、自分の地域以外のところを知らないとなかなか難しいとことだと思ふ。ずっと同じところで生活していて、1つの社会、世界しか知らない環境で、他のところのものをネットやテレビから情報を得てしまうと、どうしても良さそうに見えてしまったりすることもあると思ふ。私も中学生、高校生と教育の立場で関わっているが、やはりその東京への憧れみたいなものがあると感じる。ただ、実際経験をしてみたり、いろんな方と話をしていく中で、本当にそこは良いのか、もしくはここは良いけれどもここはちょっと嫌だからこっちを選ぼうという選択肢が生まれてくると思っている。そのため、肯定感

の醸成や、幸福度を高めるうえで1番大事なものは、人と人が交流する場をどんどん作っていくことだと思う。いつも会っている人だけでなく、なかなか会わない人や、様々な世界の方々と交流していくところが大事だと思っている。

○私も探究教室を米沢で開いているが、子供達も最初は、大人と話すことにどうしても抵抗があったり、引っ込んでしまったりすることがあるが、さまざまな方々とたくさん会っていく中で、だんだん物怖じしなくなっていく。その中で、この仕事かっこいいとか、ちょっとこういう業界面白そうだけど、自分はこっちを選びたいとか、そうしたことがどんどんできていると感じている。さまざまな世界を知った上で、自分はこういう理由でこれを選んでるんだという納得感をもっていければ、幸福度は高まっていくと思う。

○③の寛容性を高めるという意見についても同じ話だと思っている。どうしても知らない習慣や、文化に対して、何でそうするのかと思うことはあるかもしれないが、さまざまな方のさまざまな考え方に触れていく中で、そういうことを大事にする人もいるんだとわかってくる。探究教室の中でも、例えばマレーシアの日本語学校の先生方と繋いで授業をしているが、例えばイスラム教の方やヒンドゥー教の方など、さまざまな宗教の方とお話する中で、子供だから物怖じせずこういうことはなぜ駄目なのみたいなところを質問し、そういう習慣を大事にする人もいることを感じたり、自分とは考え方が違う人がいるんだと知る経験から、寛容性というのは高まっていくと思う。そうした他の地域の文化、考え方との交流が大事だと思う。

○また、先ほど堀江さんも仰っていたが、山形県はかなりチャレンジしやすい環境だと思っている。どうしても社会的なところを見ると人口減少が進んでいくとか、インフラの老朽化が進んでいくとかいう課題についての話になり、過去と比べて昔はよかったみたいなことを地元の方で仰る方もいるが、そのことをあまり深刻に受け止めてしまうと幸福度が下がってしまうとも感じる。

教室に来てる子供達で、もうどこに行っても活躍できるだろうと感じる子供達でも、「どうせ山形だから」みたいなことも言う時がある。そういうことに関しては、山形にはチャレンジしやすい環境があるので、今はこうだけど、じゃあ自分でこうやってみたらもっと上手くいくんじゃないか、面白いんじゃないかと感じて、自分で挑戦していくことも大事だと思う。幸福度となると、過去と未来、今を比べて、いや昔に比べたら駄目と感じて落ち込んでしまうこともあるかもしれない。そこに関して、人に委ねるのではなく、自分でどんどんチャレンジをしていく中で、ここはちょっとうまくいったなみたいなことを自分なりに探していく。そういうことを挑戦できる環境を作っていくところが、大事だと思う。

■遠藤 茜さん

○まず①の良さを気付かせるという意見については、1巡目の皆さんの意見をお聞きして、地域のイベントのお話もあったが、私もボランティアで上杉まつりや紅花のイベント、雪灯籠祭の手伝いをしたが、1年間をとおして地域として、常に何かしらのイベントがあるというのも珍しいと感じた。トータルで良いところはたくさんあり、その良さに気づかせるということも大切であるが、良さを知ろうとするこどもとても大事だと感じている。良さに気づくというのは、その良さを知っていることであるし、山形の良さを知るといことは、そもそも山形県について知っていないと気付くことができないと考える。気づかせるという発信も大事であるし、良さを知ることと、発信することの調和がとれた時に良さが浮き出てくるのではないかと思う。

○先ほど1巡目で話した、議員の方の所へのインターンシップについてだが、私は山形市出身なので、山形市議会の議員の方の所にインターンをさせていただいている。議会の傍聴も行うが、山形市出身でも全く知らないことがたくさんあり、地域を良くしようと話し合うことは非常に重要であり、その地域にいるからこそ気づかない問題もたくさんあるのだと感じた。置賜でも、米沢市や高島町、川西町の議員の方に協力してもらっているが、人と繋がって新しいことを行うというのは本当に大変なことだと実感した。

また、大学生は県外から来た人が多いので、そういう人こそ山形県の良さや課題にも気づきやすいと思うが、気づいた課題をどう改善するか、良さをどう活かしていくかを、県外の方が自分事として考えることはなかなかできず、山形県の良さや課題に気づいたところで終わってしまう人も多いのかもしれない。そういう人たちが地域の方達に関わることによって、もっと山形県を良くしていくことができるのではないかと思っている。

○②の女性の職場環境の改善については、山形市議会の女性の議員の方にインターンをしていたので、山形県の男女共同参画施策担当の職員の方に話を聞く機会があったが、山形県は若年女性の県外流出が男性の1.5倍だそう。女性が大学等で県外に行く人が多く、賃金が低いことや、やりたいことが山形県にはないという理由で戻らない方が多いようである。

山形は3世代同居率が高く、共働きしながら働く女性も多く、女性が働きやすい環境は整っているほうだと思う。伊藤さんも仰っていたが、女性男性の区別なく職場環境をよくしていこうとすることが大切だ。山形市の取組でいうと、山形市長がイクボスを宣言し、働きやすい環境を作るとしているのも、そういうように女性が変わるだけでなく、男性も変わっていくことに意義があると感じている。

○③の寛容性については、知る機会や人との関わる経験から、さまざまなことを得られたり、気づくこともたくさんあると思うので、やはり人と関わる場を持つというのは非常に重要だと思う。

■齊藤 幸恵さん

○若者の県外流出という話があったが、山形県の方は、奥ゆかしいメンタリティがあり、お爺ちゃんお婆ちゃんとの3世代同居率も高く、また長男は家を継ぐべきという考えも意識に根付いている。夫もそれで山形に帰ってきた。お爺ちゃん、お婆ちゃんは謙遜しながらも、自信と誇りを持って郷土のお話をしていけば、子供たちや孫に伝わるものがあると思っている。

○山形くらしを楽しむヒントということでお話したい。先ほど女性の方は自分で山形に住むことを決めているのではないかという話があったが、私の場合はどちらかというところ結婚を機に強制的に来ることになった。最初は雪道では滑る歩き方をしていた、同じ場所で何度も転ぶような経験もしたので、どうして山形にきてしまったんだろうとも思った事もあったが、先ほど、逆転の発想で雪をポジティブにとらえるということも必要という話が出たが、私も子供達が生まれてから、山形で暮らしていく上で、今いる現状の中、自分がどうしたら暮らしやすくなるのか発想の転換をしていくことが重要だったと感じている。

夫の実家も山間の中山間地で、人口減少が深刻であったり課題をたくさん抱えているところではあるが、私はそんな中でも暮らしの中で味噌を作ったり、干し柿や干し野菜、漬物などの保存の知識を学んだりしており、置賜には暮らす上での生活の知恵がたくさんあると感じている。そういうことがどんどん受け継がれなくなってきていることを危惧している。昨年夫の実家の蔵を開け、中のものを調べたが、そこに昔ながらのダンスや、ご先祖様が伊勢参りに行った際の記録が出てきて、それを専門の方に解説し

てもらっている最中だ。今の暮らしを捨てて昔に戻れというわけではないが、この地域に根差した暮らしというのは伝承されるべきだと思う。1つ1つの行事にも意味がちゃんとあるので、そういう部分を知っている人がいて、しっかり子供に継承していくということがとても大事だと思っている。

○人それぞれ価値感が違うので、何が良くて何が悪いかは人によって違うと思うが、山形と東京とを比べてどうこうではなく、例えば人口流出が多くどうしよう、山形にどう人を引っ張ってこようとかそういうことではなく、山形というのはこういうところで、こういう暮らしができる場所ということをしつかり発信して、何かそのコアな魅力に引き付けられた人たちを集めていくというのが1番良いのかとを感じる。

○また、山形は人との距離が近く、すぐ人と繋がれることも魅力と感じる。また、職場などで人間関係を築く上で、その話をまず否定しないで聞く姿勢ということも非常に大切だと感じている。聞いてもらった人の自己肯定感に繋がると思う。

○1つ提案があって、私はミモレというWEBマガジンでブログを書いているが、知事もブログをされてるというお話を聞いたので、ぜひ支庁長もブログを始めていただいて山形や置賜の魅力を広めていただけたらよいと思う。

■平 浩一郎さん

○私の会社は女性がやや多く全体の6割強ぐらいを占めている。子育て世代の3、40代、小学校低学年ぐらいまでのお子さんですと、急に体調を崩すようなことも多く、呼び出しや、急にお休みの電話が入ることもよくあり、そのような場合はやはりお母さんが対応することになるようだ。その上の世代の5、60代の方だと、介護という話が出る。これはもう誰にでも普通にあることなのでお休みされたりするのはしょうがないのだが、本人は気にしてしまう。会社のことや、仕事のことをあまり気にすることがないよう、会社としてもカバーできるようにしなければならないと思っている。お子さんの学校行事なども、積極的にお休みを取って参加してもらいたいし、子供に関わることについて特に優先できるような雰囲気を作って、融通が利くようにしなければならない。介護については、会社を辞めなければならないという話になってくるが、そこは事情を察して、できる範囲で、復帰できるよう、戻る場所を残してあげることでも大事だと思っている。少子化の時代なので、なおさら子供を地域の宝として、また高齢化社会において介護は大きな問題なので、寛大な雰囲気を持った社会であれば、幸福度は自ずと上がってくると思う。企業の大きな理解で、そういうことを考えるということは必要だと思っている。

○長らくPTA活動に関わっているが、PTAの研修で、お招きした講師の先生が、子育てを楽しんだ親の子供は、子育てを楽しむことができると言っていたことが頭に残っている。子育ても大変なことも多いが、楽しいこともたくさんあるので、本当に大変だっただけではなく、子育てを楽しめる社会であるという肯定感は大事だと思っているので、経営者という立場で、それを後押ししていくようにしなければならないと思っている。近年、働き方改革、ワークライフバランスという事をよく耳にするが、まさにこういったことだと思う。仕事は仕事以外の生活のバランスがうまくとれてる、わかりやすくいうと、休みがしっかり取れて、残業が少なく、生活の中で自分の時間を楽しむようなことを優先する考え方というのが、今の時代の大事な価値感だと思う。企業経営ということを見ると、大きな責任だと思っている。

○昨今の人手不足は実はとても深刻で、募集をかけても全く応募がないということもある。従業員の確

保と、採用という部分で我が社でも、E S、従業員の満足度を上げていくことを課題にしている。働き方はもちろんだが、②の意見の職場環境の改善ということを考えて時、我が会社の場合、例えば休憩室が男女ともにあるが、女性の従業員の方が多いので、狭いということもあるし、トイレなんかも、結果的に足りないところもあり、わかっていながらもなかなかやっぱり改善できないところもあって、何とかしなければというところで止まってしまっている。現実的にできることには限界があって、できないことの方が多いが、従業員の不安を聞いて、根本的な解決まで至らなくても声を上げていく、減らしていく姿勢がとてもやっぱり大事なことだと思っている。

○先ほど齊藤さんから自己肯定感の話があったが、認めて理解してあげることがとても大事だと思うので、従業員の話をしっかり聞く姿勢だけはまずもって、一緒に解決に向けて考えようとしている。こういうことの積み重ねが、愛社精神にも繋がって、会社にとっても大きなパワーにもなると思うので、しっかり取り組んでいかなければならないと改めて考える。

○とにかく不安だったり心配だったり、ストレスにある状態は、どう考えても幸せではないので、そういうものが少なければ少ないほど、肯定感にも繋がるものだと思うので、私の立場で、まずしっかりと責任をもって取り組んでいかなければと思っている。

■堀江 龍弘さん

○①の意見について非常に共感する部分がある。それとともに、「幸福度とは」ということについて共有や、何かみんなで深掘りができたとする、より価値が高まってくると感じている。私の会社は、上層概念として「生きるを、彩る。」を掲げている。空間を作る会社なので、もちろんお客様の空間を彩りたいと思うが、自分達、仲間の人生における幸せだったり、時間の過ごし方などを考えていくということが大事だと思っている。このため会社では、月1、2回ほど勉強会をしており、ともすると、とても面倒くさそうにも思えるが、小学校の時間に道德の勉強があるように、大人になってもそういった勉強が必要だと思い、みんなで集まって話をしている。住宅を提供しているが、ただこれいいですよ、だけではなく、やはり幸せや、あるいは死生観やどう生きてどうするのかということもみんなで話し合った上で提供する住宅や空間であれば、響き方、提供する価値が変わってくると信じている。そういった中で肯定感の醸成は大事だと思っている。教育においても、そういったものに触れる機会があればよいと思っている。

この前支庁長とお話した際、「Lessismore」、「余白がある空間があるほうが裕福である」という考え方を教えてもらいとても共感した。飯豊町で育った人間からすると、東京に行けば全てがあるようにも思えるが、「足るを知る」というか、それ自体が幸せであるというような教育、醸成ができればと感じる。

○②、③の意見については、私は結婚して置賜地域に戻ってきたが、あまり違和感なく、「うちの嫁」とまわりに紹介をしていたが、それについて地域のお爺ちゃんに怒られたことがあり、「嫁って失礼だろ」と言われて、確かに上からの言い方だなと思い、「奥様です」と言うようにしている。これが地域に浸透してしまっている女性の環境なのかと気づき、そういうことから変えていかなければならないとも思った。

○また、置賜で「爺ちゃんキャンペーン」をやるのもいいと思う。保育園のお迎え行くのは爺ちゃんである方がカッコいいみたいな考えがあってもよい。やはり女性の働き方や、例えば休みやすくしましょうということの前提は、奥さんが全部やりましょうということが当たり前になっているところがある。別に奥さんでなくてもよいのではないか。ただ今の職場は、やはり男性が休みづらい環境でもあって、日本

全体として見ても取得できていない状況ではあると思う。山形県ほど3世代同居していないこともあると思う。だからこそ山形県、置賜で「爺ちゃんがやる」ということが、結局回って女性の職場環境の改善や寛容性を高めるところに間接的に繋がるのではないかと思う。

○ES の話をすると私の会社は実は女性が非常に多い。建築業なので男性が多いと思われると思うが、現場は男性が多いが、設計だったり、宿泊施設だったり女性が多い。休みやすさは、頑張ってみんなで手分けをしながらやってるところで、DXの取組についても業界としてもかなり先進的にやっているほうである。

■山上 絵美さん

○肯定感の醸成についてだが、テレビに出るといのはとてもよい効果があると思っている。NCVさんにも豆の取組をよく取り上げていただいております、テレビで取り上げられると、「頑張ってるんだね」と視聴された方から声をかけていただけることが本当にありがたい。何か活動したら簡単に地域の新聞に載せていただけることは、本当に大きいと思っている。こういったことをとおして肯定感の醸成されていくと思っております、メディアの力は大きいと思っている。

また、豆の展示会を開催しようとした時に、若い男性から「法被を着たくない。法被を着て東京に行くのは恥ずかしいから嫌だ。」という発言があり、話し合いの場が静かになってしまったことがある。この発言について、なるほどなと思った。それではみんなでおしゃれをしていきましょうということになり、イベントを開催する際は、今もずっとこのスタイルを続けている。自慢できることはカッコいいことだと思う。

○寛容性については、「雪国体験ツアー」の資料をお配りした。10年ほど前から移住体験ツアーを夏や秋に提言型のツアーとしては開催していたが、うちの団体の理事から、「雪をアクティブに楽しみたい人、楽しみたいくない人、いろんな人達がいる。その意見を否定しないように」との意見があり、なるほどと思い、今回初めてオーダーメイド型のツアーとした。資料を見ていただくと、爺ちゃんと藁細工体験や、婆ちゃんとお茶のみなどのプログラムがあり、実際先日までこのツアーを実施しており、3組の方に参加していただいた。

タイ人のグループや、東京、福島などからご参加いただき、実際に藁細工や、婆ちゃんとお茶のみを体験していただいた。地元の方からも、このオーダーメイド型の雪体験ツアーは、よいアイデアだと言っている。というのも、受け入れ側の私達は、新しいものを作っていないので、全く無理をしていない。本当に普段あるものや、いる方のところに行ってお願ひするだけなので企画する私達の負担もない。参加者の方々からは、とても贅沢なツアーだったというご意見もいただいている。こういった体験ツアーで、参加者を受入れることで、寛容性も得られると思っている。今回のように、全国から来られる方、また外国から来られる方がいて、食文化や暮らし方が違う方々もおられる。このような方々を受け入れることで、例えば移住者が来る場合に向けて心臓をたたいておくとか、多様性、寛容性を積み重ねていけると思っていて、こういったことに地元の方に慣れていただければ、移住者をスムーズに受け入れていただけるのではないかと考えている。

また、交流ツアーをやり、そこから得られたものも大きいと感じている。この地域がよいという人もいれば、雪が大変で住みにくいという方もいて、そういった方々と交流して話をしていく中で、いろんなアイデアが出てくると思っている。雪が降ることは変えられないが、雪を楽しんでいること、また、雪

を収入に変えること、こういったアイデアも、交流から得られるのではないかと考えている。寛容性や肯定感を得るには様々な方法があると思うが、私どもはこういった取組をとおして行っている。

先ほどの堀江さんの爺ちゃんの話は非常に面白い。こういった爺ちゃんが増えればいいなと思う。

【全体をとおしての意見交換】

□西澤支庁長

NCVとして、地域のよいところに焦点を当てて、それを紹介して、ここで暮らしていく価値というものを常に発信されている。

■伊藤優子さん

番組で、紹介することで、「焦点をあてていただいて嬉しかった」「自分のやり方にはなかったことを他の方がやってるのを見て参考になった」など言ってもらえる。地域の経済が回るようにということも心掛けていて紹介もしている。堀江さんにも1日密着などで番組に出ていただいているが、素敵な人を紹介することで地域の方もより頑張ろうという気持ちにもなる。

□大垣敬寛さん

一人一人が自分の取り組みたいところに取り組んでいくことが大事だとは思うが、私は探究教室をしているので、子供たちがさまざまな大人と関わりながら、それこそ雪を使って稼ぐにはどうしたらいいかなどについて考えられるとよいと思っている。イベント的な形でももちろんよいと思うし、ものづくり的なものだったり、長期的に取り組んだりすることでもよいし、大人が子供の挑戦の機会を作っていくことが、個人的には幸福度の向上にも繋がるし、地域がもっと楽しくなっていくことにも繋がると考えているので、うちの会社だったらこういったことができる、いや自分のやってる取組だったらこんな関わり方がということがあったら教えていただきたい。

■堀江龍弘さん

私の子供は、自然の家のキャンプに参加するのがとても好きで、キャンプには置賜中から、2、30人が集まってくる。子供達からすれば普段関わることがない地域の小学生と一緒に活動できる経験、交流は貴重なものなのだと思う。これが地域の親子で参加できるとか、もしくは子供達が参加して地域の婆ちゃんとかが面倒を見てくれるといったことがあれば参加したいなと思う。冬なんかは子供に何をさせようという問題があるので、何か集まれるような機会があればいいなと思う。

□西澤支庁長

大垣さんの質問は、お子さんを例にあげていたが、テーマについての話の中で、大垣さん、堀江さんからは、チャレンジ、挑戦というキーワードがあった。それが主線にあり、後押ししていくことが重要ということだという点で質問の件と共通した話だと思う。大垣さんの場合、探究塾という形でお子さんがネットを使う際、受動的ではなく主体的に自分のことを自分で表現するということを教えている。

■大垣敬寛さん

塾では与えられたものを楽しむというよりは、自分達で作る楽しみということを作ろうとしている。例えば先ほど話に出たキャンプだと、子供達自身が、自分達がやりたいキャンプを企画して、どうやったら集客できるのかなど考えていくことで、子供達が本当にやりたいことが見えつつ、大人がサポートすることは多々出てくるとは思うが、次はここを反省してやろうという学びになってどんどん企画するよう

になり、楽しみを作っていけるようになると思う。

□西澤支庁長

遠藤さんは、先ほど議員の方へのインターンシップの経験など話してくださったが、相当受動的ではない経験をされていると思う。

■遠藤茜さん

普段の学校での授業とかで教わるだけでなく、生の現場に行って、生きた情報を大事にしようと思っているので、普通に生活しているだけではできない経験を主体的にすることでさまざまな学びに繋がっていると思っている。

□西澤支庁長

齊藤さんは、もうすでにさまざまな形で広報発信されているが、本日の会議で印象に残ったこと等あるか。

■齊藤幸恵さん

堀江さんの爺ちゃんの話が印象に残った。巡り巡って女性が楽になるのはとてもよいと思う。

また、大垣さんが話された、子供自身が企画をするということについて、私も山菜ツアーや、雪に野菜を埋めたものを収穫して鍋にするイベントなどをやっているが、私が企画するのではなく、子供達が企画することで、どういう視点をもっているのか知る機会になり面白いと思った。

□西澤支庁長

平さんはいかがか。

■平浩一郎さん

先ほど大垣さんがおっしゃった、与えられた楽しみではなく、作っていく楽しみということに関してはとても共感する。子供達が興味を持っていることをどんどん探究していく姿勢、生きる力を育むには主体性を持つということが大事だと思う。

□西澤支庁長

最後に山上さんからお願いしたい。

■山上絵美さん

先ほど大垣さんの話を受けて思いついたが、子供たちが他人を楽しませるというツアーの企画を考えてもらって、都会の子に雪で楽しんでもらうにはどうすればいいかを子供たちが考える。大人は、「それはできない」と絶対言わないという会を作りたいなと思った。他の人を楽しませることが果ては寛容性に繋がっていくと思う。